学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

２０２３．４．１

文責／ＪＵＮ

ポストコロナは次の時代への歩み始め

１　コロナ禍の出口

マスク着用を義務づけない卒業式、在校生も保護者も参加しての卒業式。声高らかに歌うことのできた卒業式。ようやくこの日が来た、ようやくコロナ禍の出口が見えた、そう感じたのは私だけではなかっただろう。３年もかかるとは……、長かった、ほんとに長かった！

コロナ禍は、人類を生命の危機に晒した。しかし、私たちの苦しみは、命の危険への怯えだけではなかった。つらかったのは、コロナ禍によって人と人とのつながりが脆弱化したことだった。人は一人では生きられない。人生は他者とつながることで成り立つ。その他者関係に困難さが生まれたのだ。

そのつらさは、年齢にかかわらずだれにでも押し寄せた。もちろん、私たち教師も同じような渦に巻き込まれた。しかし、自分自身のつらさに耐えるだけでなく、子どもの学びや成長にどれほどの悪い影響を与えるものかと感じつつ子どもたちの他者関係を規制しなければならなかった。それは教師には相当きついことだった。そのきつさ、しんどさに耐えながら、明るい希望を醸し出すように努め続けた心労は教師ならだれもが感じたことだろう。

その出口が見えたのだ。

政府は、来年度から、学校内におけるマスク着用を求めないと述べた。給食の際の黙食推奨の方針もなくすようだ。

もちろん、何もかもがすぐ元通りになるわけではない。感染の次の波が来るかもしれない。だから、感染対策を怠ってはならない。とはいえ、少なくとも、教室内における子ども同士のかかわり方の規制はかなり緩和されるだろう。そうなれば、机を向け合うグループ学習も、隣同士で聴き合うペアの学びも、机をコの字に並べて考え合う学び合いのスタイルも、授業内容に合わせて自由にできるようになるのではないだろうか。このことの意義はとてつもなく大きい。

つまり、令和５年度は「ポストコロナ」時代の始まりなのだ。

それだけに、ここで私たちが自覚しなければならないことがある。

それは、「元に戻る」という考え方ではなく、「次の時代への歩みを始める」という考え方に立つべきだということである。

２　ポストコロナの教育は、生徒エージェンシーへの出発

私は、知ったかぶりして横文字の言葉を使うことは好きではない。だから、ポストコロナは多く

の人が使っているからまあよしとして、エージェンシーとはどういう意味なのか、どういう経緯で出てきた言葉なのか、その理解がまだ浸透していないのだから、この文章を読んでくださる皆さんに訴えたいのなら、日本語で記すべきだろう。けれど、エージェンシーとはこういうことだと端的に日本語に表すのは難しい。例えば、「子どもの主体性」と言ったとして、そういうことには違いないのだけれど、それで十分かと言うと首を傾げざるを得ない。そういうことでもあり、いまの段階では、ＯＥＣＤ（経済開発協力機構）から示された言葉のままで語らせていただく。ただ、世界 30 を超える国の識者で協議したＯＥＣＤのラーニング・コンパス（学びの羅針盤）の仮訳には、以下のように示されている。

> ラーニング・コンパスの文脈における生徒エージェンシーとは、生徒が社会に参画し、人々、事象、および状況をより良い方向へ進めようとする上で持つ責任を担うという感覚を示しています。エージェンシーは方向付けとなる目的を設定し、目標を達成するために必要な行動を見いだす能力を必要とします 。働きかけられるというよりも自らが働きかけることであり、型にはめ込まれるというよりも自ら型を作ることであり、また他人の判断や選択に左右されるというよりも責任を持った判断や選択を行うことを指しています。

教師は、「生徒」という言葉がつくとすぐ授業のやり方のことだと考えがちだけれど、これを読むと、そのように短絡的に受け止めるのではなく、生徒をこれからの時代を生きる社会人としてどのように育てようとしているのか、そのための羅針盤なのだと分かっていただけるだろう。

そこには、生徒が「目的を設定し」、生徒がそのための「行動を見いだし」、生徒が「自ら働きかけ」、生徒が自ら「そのための型をつくり」、生徒自らが「責任を持った判断や選択を行う」、そういう生徒像が示されている。そのように読むと、ここに示されているのは、学ぶことに対しても、周りに対しても、社会に対しても、つまり生きることに対して自ら積極的にかかわる意志と行動とそのための責任や判断を育てなければならないと述べているのだと考えられる。

では、私たち日本の学校では、どのような教育を目指すべきなのだろう。そう考えると、文科省から示されている「主体的・対話的で深い学び」が、「生徒エージェンシー」と同じ方向を向いていることに気づけるのではないだろうか。

そこには、これからの社会を築いていく子どもたちが積極的に行動する社会人として育つために、「与えられる学習」ではなく「自ら取り組む学び」にし、どんなことをも、ともに学ぶ仲間たちとも「真摯に対話して」、自分たちでどこまでも「深いものを目指す」、そういう授業にしていく、そういう授業づくりへの願いがこめられているのだ。それはそのまま未来への願いでもある。

しかし、そういう世界の趨勢や未来のあり方を見ることなく、「基礎・基本の定着こそ学校の役割」などという固定化した考え方のもと、「教師に教えられる勉強」に終始する傾向は依然として根強く行われている。対話的学びを難しくしたコロナ禍が、そういう状態を顕著にした。コロナ禍は、教師からも子どもからも、「与えられる学習」ではなく「子どもが自ら取り組む学び」にという、生徒エージェンシーにのっとった学び方を奪ったのだ。

生徒エージェンシーには、その「学び方」についても、次のように示されている。

何をどのように学ぶかを決定することに積極的に関与するとき、生徒はより高い学習意欲を示し、学習の目標を立てるようになるでしょう。さらにこのような生徒は、生涯を通して使うことのできる「学び方」というかけがえのないスキルを身につけていくことにもなりうるでしょう。

教師は、その１時間の授業という狭い視野で授業づくりをしてはならない。狭い視野で考えるから、いかにその時間の学習内容を理解させるかということだけになってしまうのだ。もちろん、その時間で学ぶべき目標に到達できることは大切だ。しかし、それは、教師に与えられ、教えられるのではなく、子どもたちが自分たちで取り組み見つけ出していく、そういうものにしなければならないのだ。そうなったとき、それは生徒エージェンシーで述べられている「学び方というかけがえのないスキル」として、子どもたちの内に蓄積されていくことにもなるのではないだろうか。

ポストコロナの学校教育は、そういう教育への再スタートとなるべき、私はそう断言する。「再」と記したのは、コロナ禍さえなければ、「主体的・対話的で深い学び」が示された新学習指導要領が施行された令和２年度にスタートを切っていたはずだと思うからである。

令和５年度が間もなく始まる。抑圧された空気は徐々に緩和されていくだろう。今こそ、次の時代への歩みを始めるときだ。その決意を抱き、見通しを立て、４月からの具体的な実践につなげていきたいものだ。

３　どんな学び方にしていくか

次の時代につなげる教育に取り組む学校にするために、具体的な授業のあり方を考えることになるが、その前に、なんとしても全教師で確認していただきたいことがある。それは、

一人の子どもも独りにしない学校にする

という指標をもつことである。この指標があるかないかで、たとえ同じような取り組み方をしたとしても、生み出される事実は全く異なるものとなる。それは、この指標があることで、教師は一人ひとりの考えに目を向けることになり、それが子どもの分からなさや間違いを尊重する心構えにつながり、子どもの状況、思いに心及ばせる心遣いを生み出し、子どもと子どものつながりを感じ取る感覚を醸成し、それが一人ひとりの子どもの育ちを支える授業になると思うからである。

さて、そういう指標のもと具体的な授業づくりに入っていくわけだが、その第一は、なんといっても「子ども同士で協同的に学ぶ」という学び方を行えるようにすることである。私は、それを「学び合う学び」と称しているが、学びは、一人で行うものよりも他者とかかわって学ぶもののほうがはるかに深くなるからである。もちろん、個人の努力は不可欠である。しかし、一人で成しうることは他者と協働して生まれるものには及ばない。

もちろん、それは、学習面だけのことではない。学ぶことも生きることの一環だということを考えると、「学び合う学び」という「学び方」は、他者とともに生きることそのものだと言える。学校において、孤独感を感じる子ども、抑圧感を感じる子ども、自分の居場所が見つけられない子どもが生まれる可能性があるとしたら、「学び合う学び」はそういう傾向を薄くするにちがいない。

では、学びを「学び合う学び」で行えば、どういう学びになるのだろうか。それを知っていただくために、右のような表にしてみた。中央に「学び合う学び」を配し、左側に子どもの学び方、右側にその際の心の持ち方を記してみた。左側の取り組み方については説明する必要はないだろうから、右側の心の持ち方について説明させていただく。

子どもが取り組む	学び合う学び	他者に頼る
子どもが考える		他者を尊重する
分からなさを大切にする		３つの「い」を大切にする
子どもが発見する		他者とつなげる
子どもが創り表現する		他者から学ぶ
子どもが協働する		安心を生む責任を共有する

一般的に「他者に頼る」ということはよくないことと思われている。しかし、生きていくうえで、他者に頼ったほうがよいことはいくらでもある。私は、「他者に頼る」ということは学びへの積極さの一環だと思っている。「ねえ、これ、どうすればいいの？」「ここのところ、教えて」「ここまで考えたけど、ここで困っているんだけど」と尋ねることは、「学びたい」「分かりたい」という積極さの表れだと思うからである。「分からへん！」「教えて！」が言える教室にする、それは、「一人の子どもも独りにしない教室」への第一歩なのだ。

二つ目の「他者を尊重する」は、一つ目の「他者に頼る」と表裏の関係にある。自分を頼ってくる仲間の声にどう対応するか、そのとき、それがわからなさであっても間違いであっても、尋ねてでも分かろうとしている行為として尊重しなかったら、その教室は「一人の子どもも独りにしない教室」にはならない。もちろん、それは教師にその思いがなければできないことでもある。

三つ目の「３つの『い』」だが、それは、「分からな<u>い</u>」「間違<u>い</u>」「考えの違<u>い</u>」のことである。すべての子どもが学べるためには、この３つが大切にされなければならない。分からないから、間違ってしまったから学びたい、そう思う子どもでいっぱいになる教室は、分からないことも間違うことも尊重される。そして、３つ目の「考えの違い」だが、自分の考えに固執してしまうと、その考えはそれ以上深まらなくなる。考えの違いを二者択一にしてどちらが正解かとするのではなく、異なる考えと考えを擦り合わせれば、場合によっては、そのどちらでもない深い考えに行き着くこともできる。学びに考えの違いは大切なものなのだ。

四つ目の「つなげる」は、学びにおける基本中の基本である。自分の考えと仲間の考えをつなぐ、自分の考えではなかったけれど、そこに出された仲間の二つの考えをつなぐ、自分たちの考えとテキストとつなぐ、学びの深まりはそのことによって成し遂げられる。

そして、五つ目に掲げた「他者から学ぶ」は、学ぶための心構えとして、いつも有していなければならないものである。

すべての子どもが学べる教室には、どんなに難しい課題に向き合うときでも、どんなに分からなくなったときでも、日ごろから実感している「安心」が存在している。そして、その「安心感」をつくらなければという教師と子どもとの共通認識が存在している。それは、ある意味、教師と子どもとの責任だと言える。

以上５つの「心の持ち方」があるかないかで、「学び合う学び」の実現状況に差が生まれる。「学び合う学び」に取り組む先生方は、そのことを理解していてもらいたい。そして、もし、子どもたちの状況がそれとはかけ離れたものであったら、何からどう取り組んでいけばよいか考え、地道に、一

歩一歩実践していってもらいたい。その際、大切なことは、性急に考えないことである。これまでそうではない状態が当たり前になっていたとしたら、子どもは、そうしなければならない、そうしたほうがよいといった納得を感じなければ変われないからである。だから、何もかも「こうしなさい」と命じてやらせるようにしないことである。たとえ、「こうしていこう」と示すことがあったとしても、そのことに対して子どもたちが納得できるような手立てを講じることを忘れてはならない。もちろん、その際、大切なのは、教師が毅然とすることである。ぶれないことである。そして、教師こそが、率先して実践することである。決して口先だけの教師になってはならない。

４　４月のスタートをどう切るか

４月のスタートにおいて、何よりも先に取り組まなければならないことが二つある。その二つについて述べる前に申し上げておきたいことがある。それは、この二つをよりよいものにするために、どう実践するかは、それぞれの学級の状況に合わせて、先生方が考えださねばならないということである。どんな状況にも通じるマニュアルめいたものはないからである。

取り組むべきこと、その第一は、**「聴ける教室」にする**ことである。

学びは他者とのかかわりにおいて深めることができる。他者とかかわるということは、相手の考えに耳を傾け、相手の考えとつなぎ、そのやりとりから考えを生み出すということである。それには「聴くこと」が最も重要なこととなる。

もし、新しく担任した学級の子どもたちが、何かと言うと口々にしゃべる状態になっていたら、このままでは「学べる学級にはならない」と考えるべきである。そして、ゴールデンウイークまでの一か月、どのようなことに取り組むか考えることである。

前述したように、子どもに取り組ませることはそれぞれの子どもの状態に応じて考えてもらうのだが、教師には陥ってはならないことがある。それは、次の３点である。

- 子どものおしゃべりが続いている間は、発問したり話したりしない。
- 教師の問いにすぐ反応して言う子どもがいる場合、その子どもの言ったことを受けて進めるようにしない。それが常態化すると、同じ子どもがいつも口を出し、教室がすぐしゃべる子どもと言わない子どもとに二分化されてしまう。
- 大切な発問をするとき、課題を示すとき、子どもの顔を教師の方に向けさせる。それができていない状態で話してしまうと、聴けない、聴かない状況が常態化する。

読んでいただいて気づかれたことと思うが、以上三つのことがどうなっているかは、これからの一年に大きく影響する。それが、授業をするときの価値観になるからである。この一カ月でよくない価値観が生まれてしまい、その態度が常態化したら、それを変えることはかなり困難なことになる。教師は、そう腹をくくるべきである。

「聴ける教室」、それが学べる教室の基本であり、大元である。

二つ目に取り組むべきこと、それは、教師がそのように実行しながら、子どももそのように考えられるようにしていくことである。それは、**「分からなさ」や「間違い」を「学ぶための宝物」にする**ことである。

それには、早く分かることが最も優れていることではないと教えなければならない。これからの時代、早く分かりたかったら、ＡＩやコンピュータを利用することになるだろう。学ぶ価値は、正解を早く出す、早く理解するということよりも、分からなさに対して、絵本「スイミー」のように、「いろいろ、うんと考える」、そういう粘り強い学び方こそ称賛されなければならない。それは、そのように考える「過程」に、それ以外のさまざまなことへの応用を可能とする「学び方」が存在しているからである。「生徒エージェンシー」ででも述べているように、学びは、学んでいるその題材の理解という学びとともに、どのように取り組むかという「学び方」を学ぶということにも心を馳せなければならないのである。

そう考えたとき、「分からなさ」や「間違い」が生まれることを劣っていることとして否定してはならない。むしろ、その「分からなさ」や「間違い」をきっかけにして取り組むようにしなければならない。というのは、多くの場合、子どもが「分からない」と感じる個所、子どもが「間違ってしまいやすい」個所のすぐ傍らに、その「学びのツボ」が存在しているからである。

学びに入ってこられない子ども、すぐあきらめてしまう子ども、やる気が起こらない子ども、いら立って友だちにちょっかいを出したりする子ども、そういう子どもの多くが、この「分からなさ」と「間違い」でそうなってしまっているということがかなりあるのではないだろうか。

自分の「分からなさ」から、とっても大切なことが分かってきた、「間違えてしまった原因はどこなのか」とみんなが考えてくれたおかげで、よくわかったし、それどころがみんなからも余計よくわかったと言って喜んでもらえた、そういう経験を何度となく経験すると、子どもたちは、「分からないことは当たり前なのだ」と思うようになり、「間違うから余計よくわかるのだ」とも考えられるようになる。

以上二つは、いわば**「学ぶときの価値観」**である。その「価値観」に対して、早いうちに納得できるようになり、その価値観から生まれる「学ぶ安心」を感じられるようになれば、教室の状況に確実に変化が生まれる。「聴くこと」でおしゃべりが減ると、教室に「落ち着き」が生まれる。よく考えるにはこの「落ち着き」、もっと言えば「静寂さ」がなければならないのだが、教室にはそのようになる方向が形作られる。

だれもが学びに参加するには、「分からなさ」「間違い」がこよなく大切にされなければならないのだが、それが、たった１カ月そこらで定着するとは思えないが、子どもたちの内に、そうすることによって「安心感」が生まれ、どの子も取り組む意思が持てるようになると、教室に学びに向かう「意欲」が漂うようになる。

もちろん、学びの質は上げなければならない。しかし、それは、前述した状態がつくられてからでよい。子どもに取り組ませる内容のレベルを上げたとき、「学び合う学び」を行う子どもたちの状況ができていなければ、どれだけ教師が意気込んでも空回りすることになるからである。

４月から５月にかけての一年間のスタート時期に必要なのは以上のことである。そのスタートを誤ると、それは一年間尾を引くことになる。

最後に、先生方に一言。それは、これからの教育に必要な教師の力は、上手に教えることよりも、「子どもの事実がみえる」ことと、「子どもの学びを促進する」ことである。

教科書のＱＲコードで思うこと

つい先日、来年度から使用することになる教科書の検定が終了したという報道があった。そこで大きく報じられたのは、どの教科の教科書にも「ＱＲコード」がつけられたということだった。すでに配布されているタブレットでコードを読み取れば、ページ数が限られている紙面では掲載できない量の写真も資料も見ることができるし、動画まで視聴できるということで、子どもたちの学習の深まりになるだろうということだった。

その報道を受けた私に驚きはなかった。時代の流れから言って想定できることだったからである。このことによって、これまでより量も質も高い情報を子どもたちが得ることができる、それは間違いないだろう。そう思いながら、私が思ったのは、この情報量と質を、子どもの学びにつなげられるか、もっと言えば、「主体的・対話的で深い学び」に寄与させられるか、それともただの便利で分かりやすいものだけにしてしまうか、それはすべて教師の授業、教師の対応にかかっているということだった。

これを理解させたい、この資料からこんなことを分からせたい、そう考える教師の指示によって、次々とＱＲコードを読み込ませていったら、それは子どもにとって教師から教えられる材料になるだけであって、子どもが学習課題に主体的に向き合う資料にはならない。

便利で分かりやすいこと、それは子どもの脳を活性化しない。学びは「分かるという結果」よりも前に「こうだろうか、ああだろうかと取り組む過程」で生まれるものなのだ。だから、「分からない」「間違い」に向き合い、そんな中から「子どもが発見する」、そこで学びが生まれるという考え方を教師は持たなければならない。

そう考えれば、ＱＲコードの向こうに準備されている資料を、そういう子どもの取組の過程にどう組み込むかという考え方がとても重要になると分かってもらえるだろう。もちろん、ＱＲコードから読み込む資料だけではなく、教師が別の資料を準備することはとても大切だし、子どもが別の資料を見つけてくることもなくしてはならない。

見れば分かること、すでにほぼ分かっていることを問題にして子どもに発表させる授業をしている限り子どもの学びは深まらない。未知なること、まだ分かっていないこと、こうだと思っていたけれどどうもそうではないのではないか、子どもがそのように感じる課題に向かって取り組むとき、学びは、学ぶ喜び、醍醐味を伴って登場する。

ＱＲコードの向こうに仕組まれている資料を、分からないでいること、未知なることに夢中になって取り組む子どもたちの「学びの過程」に不可欠なもの、子どもの学びを促進するものとして位置づけられるかどうか、それは、教師の授業にかかっていると言える。

コンピュータ化により学びがデジタル的になった。それは時代の流れである。しかし、学ぶという行為は極めて人間的なものである。子どもが道具に使われる授業にしてはならない。道具を使うのは人間である。人間の意志であり、人間の創造性である。

タブレットにしてもＱＲコードにしても、教師は、使わなければいけないから使うのではなく、子どもの学びのために、いつ、どこで、どう必要なのかと考えて活用すべきである。大切なのは、「教師の授業デザイン」なのだ。学びは教師次第、その覚悟が不可欠である。